

《研究ノート》

好古家の「ケルト」観
— ケリュス伯とエドワード・ギボン —

疋田隆康

はじめに

近年、「ケルト」像の形成、あるいは「ケルト」の表象の変遷といったテーマに関しては、様々な角度から論じられている。その結果、今日一般に知られている「ケルト」像の原型が形成されたのは16世紀末から18世紀にかけての時期であり、特にイギリスやフランスにおける知識人の活動の影響によるところが大きいことが認識されるようになってきている。一口に知識人といっても様々な人々がいるが、筆者は以前、今日につながる「ケルト」像の形成においては、特に、「好古家」と呼ばれる人々の活動が与えた影響を明らかにすることが重要であると論じたことがある¹⁾。その際にも取り上げたが、好古家と古代史研究との関係については、古代史や史学史についての膨大な業績を残した、20世紀イタリアを代表する歴史家、モミリアーノの研究がある。彼の研究によれば、ヨーロッパ、例えばオックスフォードやケンブリッジなどでは、16世紀後半から17世紀前半まで、古代史はギリシア・ローマの歴史書への注釈という形で教授されており、それらの歴史書を基にして概説を書こうという発想は当時の人々にはなかった²⁾。この状況が変わってくるのは17世紀後半からである。それには2つの要素があり、1つは、年代学論争³⁾によって正確な年代決定の基礎が次第に築かれてきたこと、もう1つは文献以外の史料の利用が可能となったこと、つまり碑文学、古文書学、貨幣学など今日歴史補助学と呼ばれている諸科学の発展である。これらの点で大きな役割を果たしたのが、好古家である。モミリアーノによれば、16世紀から18世紀における歴史研究には2つの流れがあり、1つは哲学的歴史で、ヴォルテールやモンテスキューなどに代表される、理論的な歴史である。もう1つは「考証研究」と呼ばれるもので、主として好古家によって用いられた研究方法とされる。これら2つの流れを統合したのは、18世紀後半の「ローマの歴史家」、エドワード・ギボンであるとモミリアーノはいう⁴⁾。

また、好古家の問題は、史学史や歴史意識などのテーマとも深く関わっており、その際にはしばしば「国民」あるいは「民族」の起源問題が取り上げられる。阿河雄二郎氏は、フランスの起源問題にかかわる言説を中心に、近世前半の歴史研究の流れを考察しているが、それによれば、フランス史学史の観点からは、16世紀から18世紀は、「考証研究」の進展や

「古文書学」の確立により、近代歴史学の方法論につながる基礎が築かれた時期であるという。そして、「フランス＝トロイア起源」説が16世紀の「考証研究」の進展により荒唐無稽なものとして退けられた後、17世紀に再び復活していることを指摘している⁵⁾。原聖氏はブルターニュの「民族起源」の問題を中世から現代までの長いスパンで論じており、16世紀から18世紀に関しては、トロイア起源説が歴史的意味を失い、代わりに中世には忘れられていた「ガリア」や「ケルト」が再発見され、民族起源論としての言語系統論が議論されはじめ、その影響で「ケルト」概念が新たに作り直された時期であるという⁶⁾。これらはいずれも好古家を中心に扱ったものではないため、本稿では好古家と「ケルト」との関係を検討するための第一歩として、好古家による「ケルト」研究はこれらの流れの中にどのように位置づけられるのか考察してみたい。

その際に問題になるのが、ケルトとガリアの関係である。カエサル『ガリア戦記』冒頭部において、ケルト人とガリア人が同じものと説明されている⁷⁾ように、これら両者は、古代ギリシア・ローマの作家たちによってしばしば同義に用いられているが、ラテン語の著作ではガリアの方が使用頻度が圧倒的に高く、中世になるとこの傾向はより顕著になったようである。16世紀になると、「ケルト」という言葉が近代語でも用いられるようになるが、17世紀の終わりまでは、ケルトとガリアは同じものとみなされていた。ところが、18世紀になると、民族起源論の論争の過程で「ケルト」概念が形成され、独り立ちしてくるという⁸⁾。

そこで本稿では、この流れの最後の部分18世紀における好古家の「ケルト」観に注目し、特に、モミリアーノが16世紀から18世紀の歴史研究の終着点として位置づけているエドワード・ギボンと、美術史や考古学の成立史上重要な人物として高く評価されているにも拘わらず、史学史など歴史研究の流れや「ケルト」像の形成といった点では注目されてこなかったケリュス伯とを中心に取り上げ、この問題を検討してみたい。

第1章 ケリュス伯のケルト観

まず、ケリュス伯以前のケルト観について整理しておこう。フランスにおいては、16世紀初め、ジャン・ルメール・ド・ベルジュがトロイア起源説をガリアと結びつけた。これは、ノアの子ヤベテの第4子サモテスがガリアの初代の王となり、その後ガリアの人々は植民活動を行い、小アジアにトロイアを建設、そしてトロイア戦争の際、トロイア王プリアモスの息子ヘクトルとアンドロマケーとの間の子アステュアナクスが、トロイア陥落後も生き延び、フランクスと名を変え、ガリアへたどり着き、ガリア人の王となったというものである⁹⁾。この物語は、フランスの起源をトロイア戦争と結びつけるために作られたフランクス伝説とヴィテルボのアンニウス¹⁰⁾による聖書起源説とを結びつけたものであったが、ギヨーム・ポステル、ピエール・ド・ロンサールの『フランシアード』(1572年)などに受け継がれ、

16 世紀を通じ、フランスの起源伝説として繰り返し語られた¹¹⁾。

しかし、ガリア人だけがフランスの起源とみなされていたわけではなく、16 世紀当時、キンブリ族¹²⁾やフリュギア人¹³⁾などをフランスの起源と唱える説も存在していた¹⁴⁾。これら諸説を否定するための論拠に用いられたのは、ギリシア・ローマの古典文献であった。

フランスではイタリア・ルネサンスの影響を受け、15 世紀末から古典学が発展した。そのため、フランスではカエサルやプリニウスなどの古典文献に基づくケルト観が、16 世紀の知識人には受け入れられていた。例えば、この時期に書かれた古典の注釈書では、ケルト人やガリア人について、主要な古典文献の記述をまとめた説明がされることが多く、また、モンテーニュ（1533-1592）の『エッセー』では、古典文献に基づくガリア人のエピソードがいくつも見出される¹⁵⁾。

その後 17 世紀になると、1663 年、コルベールによって碑文文芸アカデミーが創設されるなど、古典文献以外の遺物への関心が高まり、それらを用いた研究が碑文文芸アカデミーの会員を中心に行われていくこととなった。その代表的な人物の 1 人が本稿で取り上げるケリウス伯である。当時は、トーマス・ハイドの『古代ペルシア人の宗教の歴史』（1700 年）やアントワヌ・ガランによる『アラビアン・ナイト』の翻訳（1704-1717 年）などにより、東方への関心が高まっていた時期であり、フランスの好古家でケルトについて扱っている者は少なく、ケリウス伯の著作もケルトに関するものよりエジプトなどについてのものの方が多い¹⁶⁾ののだが、ケリウス伯の主著『古遺物集成』はガリアについて一定のページを割いている数少ない著作である。

ケリウス伯（Comte de Caylus, Anne-Claude=Philippe de Thubières de Pestels de Grimoard de Lévis, 1692-1765）は、1692 年パリで生まれた。スペイン継承戦争に参加した後、美術に興味を持ち、イギリス、ドイツ、イタリアなどを訪れた。その後さらにギリシア、コンスタンティノープル、トルコなど東方を旅行し、美術だけでなく、古代の遺物への関心を深めた。彼は美術評論や古遺物に関する多くの著作を残しているだけでなく、彼の母親も文学者として知られ、彼自身も小説や舞台作品など多くの作品を著している。彼は古代の遺物のコレクターでもあり、エジプト、エトルリア、ギリシア、ローマ、ガリアの様々な遺物を収集し、1752 年から 1766 年にかけて、それらのイラストと解説を『古遺物集成』という 7 巻本にまとめて出版した（第 7 巻は彼の死後出版された）。この著作は、後に出版された同様の遺物を集成した本の模範として、またそれ以前のフランス好古家の研究を総合したものとして、広く普及した¹⁷⁾。また、ケリウス伯の研究はヴィンケルマンにも影響を与えており、美術史や考古学の成立史上、重要な人物として高く評価されている¹⁸⁾。なお、彼のコレクションのごくごく一部は、現在でもパリの国立図書館で見ることができる。

まずケリウス伯の文学作品から見てみよう。ケリウス伯は『ノクリオン、アッロプロゲース族の話』と題した短編小説を 1746 年に書いている¹⁹⁾。タイトルから分かるように、ガリアのアッロプロゲース族²⁰⁾を舞台にしたもので、主人公ノクリオンの出生を巡る話である。

アッロプロゲース族は舞台設定に用いられているだけで、部族そのものやガリア人に関する記述は特になく、わざわざプロット上必然性のないガリアの部族を舞台にしていることから、1740年代半ばにはケリウス伯がガリア人に興味を抱いていたことが窺われる。

ケリウス伯の『古遺物集成』は、正確には、『エジプト、エトルリア、ギリシア、ローマ、ガリアの古遺物集成』というタイトルだが、最初の2巻は『エジプト、エトルリア、ギリシア、ローマの古遺物集成』というタイトルで、ガリアが加えられたのは第3巻からである。この著作は、エジプトの遺物等の説明、説明で取り上げられているエジプトの遺物等の図版、ギリシアの遺物等の説明、説明で取り上げられているギリシアの遺物等の図版、というように、タイトル順に遺物等の説明と図版が収録される構成になっている。タイトルにガリアが入っていない最初の2巻には、ガリアに関する説明や図版はなく、タイトル同様、第3巻から内容にもガリアが含まれるようになっていく。次に、3巻以降のガリアの部分について概観しておこう。

第3巻では、まずガリアについて、

ガリア人はローマの征服以前、芸術や遺物に関して、大して重要な対象ではなく、我々は彼らに関することについて、非常に曖昧で不確かな光しか持っていないので、私は、たまたま私のもとにもたらされた、彼らに属すると思われるいくつかの遺物について、詳細に立ち入ることなく述べただけで満足した。

と述べ、ローマ支配下のガリアの方が、より興味深いと説明している²¹⁾。この巻では、ヘラクレスやメルクリウスなどの神々の像、ミトラなどの解説と南仏のニーム、フランス中部のヴィエンヌやリヨン、パリなどの都市について触れられている²²⁾。

第4巻では、ローマ征服以前のガリアには獲得された知識というものはなく、エトルリアなどとの交流があったにも拘わらず、政治や宗教などの面にその影響が見出されないことが指摘される。その後、マケドニアのフィリッポス2世のコインが取り上げられ、ガリア人が他の人々の行いを利用して証とされる。また、ガリア人はアメリカの未開人とあまり変わらないとの感想が付け加えられている²³⁾。この巻では、ガリアだけでなく、スペイン、特にバルセロナ出土の遺物についても扱われており、その他フランス西部のポワティエ、中部のオルレアン、シャンパーニュ地方のランス、ラングスなどの遺物などについて説明されている²⁴⁾。

第5巻では、これまで、ガリアの遺物や遺跡などを扱ってきたにも拘わらず、ガリア人に関する基本的なことについてほとんど説明してこなかったことの弁明から始まり、ガリア人の性質や制度、文明についてギリシア・ローマの古典、特にカエサルを引用しながら、説明されている。そこでは、ガリア人が勇敢で好戦的な人々であることや、かつてローマを占領したこと、人間を生け贄に捧げる風習、ギリシア文字の使用、集会の重要性や軍事に力を入れていたことなどが述べられている²⁵⁾。これらはケリウス伯独自の見解というわけではなく、古典文献の記述を要約しただけである。この巻では、ニーム、ヴィエンヌに加えて、ウ

クセッロドウヌム、ゲルゴウィア、アレシアなど『ガリア戦記』に登場するガリア人の諸都市について、その地理と出土物に関する解説が述べられ、最後にガロ＝ローマの神々についての記述で締めくくられている²⁶⁾。

続く第6巻では、まずコインが扱われ、その後、ガリアの都市などについて述べられた後、ブルターニュについての説明がある。そこでは、カエサル『ガリア戦記』などの古典文献に、ブルターニュで最も勢力が強い部族として記述されているウェネティ族について、アドリア海沿岸にヴェネツィアの語源となった同様の名前の部族が存在したことを根拠として、ウェネティ族がアドリア海からブルターニュへと移住してきた部族であることが語られている²⁷⁾。そして、この巻の結論では、エジプト、エトルリア、ギリシア、ローマについて、その特徴をそれぞれ数語でまとめた後、ガリアについて、次のように述べている。

ガリア人は戦うことしか知らなかった。確かに、ギリシアとの交易により獲得された、粗雑な無意志的記憶をかいま見ることには出来る。しかし、ガリア人は、芸術に関しては、武力によって征服した人々に劣るように思われる。²⁸⁾

また、この第6巻では、カルナックなど、ブルターニュに残る巨石建造物についても扱われている。それらについて、ケリュス伯は、ケルト人以前のものではないかと疑っており、18世紀前半に、ウィリアム・ストウクリー（1682-1765）などが提唱した、巨石建造物をドルイドの遺跡とする見方²⁹⁾とは異なる考えを提示している³⁰⁾。

第7巻では、ガリア、特にローヌ川流域から出土したローマの遺物について述べられ、その後、南仏のグラヌム、オーセール、アキテーヌ地方のサントンなどの都市が取り上げられている。最後にローマ時代のナルボンヌやスイスについての説明で締めくくられている³¹⁾。

この『古遺物集成』の記述から判断すると、ケリュス伯は、ケルト人を、勇猛で好戦的な蛮族で、エトルリアやギリシア、ローマと接触する機会がありながら、それらの文化を積極的に学ぶこともなく、文化的には劣った人々と捉えていた。ケリュス伯は、ローマ征服以前のガリアよりも、ローマ時代のガリアの方により関心がある、と3巻でははっきり述べており、実際、扱われている遺物もケルトのものより、ローマ時代のガリアのものの方が多く、3巻、4巻、7巻ではローマ征服以前のガリアについてはほとんど扱われていない。しかし、ケリュス伯はケルト人を単に未開な野蛮人として蔑視していたわけではない。ローマ時代のガリアにより興味があるとはいっても、5巻、6巻では、ケルト人に関する風俗習慣などの全般的な説明やブルターニュの巨石文化など、ローマ征服以前のガリアにもそれなりのページ数を割いて説明を加えており、ギリシア人などより文化的に劣るとはいうものの、ケルト人の独自性を認め³²⁾、評価している。

ケリュス伯が扱うのは個々の遺物や遺跡であり、その遺物や遺跡を作り、使用していたガリア人については、5巻などで簡単な説明があるが、古典文献などに関する知識が不足している読者の便宜を図るためであって、ケリュス伯自身は、ガリア人がどういう人々であるか、例えばその起源や文化、風習などの特徴といったことについて、体系的に考察を加える

といったことを試みてはいない。ところどころに感想や評価が述べられているものの、それらも当たり障りのないものであったり、慎重な態度を貫いており、ケリユス伯がどのようなケルト観を抱いていたのか明確でない。

第2章 ギボンとケルト

18世紀を代表する歴史家で、モミリアーノから哲学的歴史と「考証研究」を統合したと評価されるギボンにおいて、「ケルト」はどのように捉えられているのだろうか。

エドワード・ギボンは1737年4月27日、ロンドン郊外のサリー州で生まれ、オックスフォードに入学するが、カトリックに改宗したため追放、1753年から1758年までスイスのローザンヌで教育を受けた。イギリスに戻った後、1763年から1765年にかけてグランドツアーを行い、『自伝』によれば、この旅行中、ローマの廃墟を見たときにローマ史を書くことを決意したという。1776年から1788年にかけて『ローマ帝国衰亡史』全6巻を刊行、次に『自伝』に着手したが、未完のまま1794年に死去した。

まずはギボンの主著『ローマ帝国衰亡史』から検討してみたい。『ローマ帝国衰亡史』の第25章では、スコット族とピクト族のブリテン島への侵入について語られているが、そこではスコット族侵入以前のブリテン島及びアイルランド島の住民について、ガリアから移住してきた人々であり、そのケルト起源は特に言語、宗教、習慣などの類似によく残されていると述べている。膨大な『ローマ帝国衰亡史』の中で、ケルトについて触れているところはごくわずかしかないが、ギボンはケルトに関して実際にはどの程度のことを知っていたのか、もう少し詳しく見てみたい。

ギボンの蔵書³³⁾を見てみると、ウィリアム・カムデンの『ブリタンニア』(1607年版)やジョージ・ブキャナンの『著作集』、ジョン・オーブリーの『ブリタンニアの建造物』などがあり、実際『ローマ帝国衰亡史』第25章の本文中や注の中で、ブキャナンやカムデンへの言及がある³⁴⁾。また、『ローマ帝国衰亡史』第2章では、ティベリウス帝とクラウディウス帝によってドルイドが弾圧されたことが述べられているが、その注にはシモン・ペルティエの『ケルト人の歴史』が挙げられており³⁵⁾、これらの著作を参考にしていたことが分かる。そして『ローマ帝国衰亡史』では特に触れられていないが、ケリユス伯の『古遺物集成』も蔵書に含まれている。しかし、これらの書籍がどの程度ギボンのケルト観に影響を与えていたのかは明らかでない。

ギボンは『ローマ帝国衰亡史』や『自伝』以外にも様々な草稿やメモを残しており、さらにスイス滞在中や、イタリア旅行時の日記や書簡も公開されている。次にこれらの史料からギボンのケルト観を見てみたい。

公刊³⁶⁾されている中には、ギボンにはケルトを主題にした著作は残されていないが、彼の草稿の中には「サルスティウス、ユリウス・カエサル、コルネリウス・ネポス及びティ

トゥス・リウィウスの作品と特徴についての注釈」と題された作品が残されており、1756年1月19日の日付がある³⁷⁾。これは、17、18世紀に刊行された、4人の作家のいくつかのテキストに対する書評という形で、フランス語で執筆されたものである。この作品のカエサル項には、ガリア人及びドルイドについての記述があるが、カエサルの説明の要旨とそれに対するいくつかの疑問、批評にとどまっており、ギボンオリジナルの見解は特に見出されない³⁸⁾。

同じ1756年の秋から翌1757年秋にかけて、ギボンはチューリッヒのヘブライ語及びギリシア文学の教授ブライティンガーと書簡のやりとりをしている³⁹⁾。その中で、ギボンはユスティヌスに基づきながら、ケルト人のデルフォイ侵攻とローマ占領について触れている⁴⁰⁾。

ギボンは1753年から1758年までローザンヌで教育を受け、イギリスに一旦戻った後、1763年からグランドツアーに出発する。ギボンのケルトに関する知識はこのローザンヌ滞在中とグランドツアー中に得られたものが基礎となっていると考えて間違いないであろう。そのグランドツアー中の日記をひもといてみると、彼は1763年前半のパリ滞在中に何度かケリュス伯に会っている⁴¹⁾。この時、ケリュス伯は『古遺物集成』を5巻まで刊行しており6巻の準備中であつたはずだが、ケルトに関する情報交換があつたかどうかは分からない。

同じ1763年の秋、ギボンはイタリア旅行に向けての下準備として、フィリップ・クリュヴェ (Philipp Clüver, 1580-1622) の『古代のイタリア』を読んでいる⁴²⁾。日記には、その日に読んだページ数とその内容の要旨や感想がフランス語で記されている。ケルトに関しては、ケルト人のイタリアへの侵入、インスブレース族⁴³⁾のこと、ドルイドのことなどへの言及がある⁴⁴⁾。また、日記とは別に、読みながら覚え書きも作成しており、そこでは、古代イタリアの名称から始まり、地域別にその地に住んでいた人々のことなどが記述されている⁴⁵⁾。この中でもケルト人への言及は幾度も見出され、日記同様にケルト人の植民のことやインスブレース族のこと、ローマ占領のことなどが述べられており⁴⁶⁾、その他にアルプスがケルト語源であること⁴⁷⁾なども記述されている。これらの記述内容も、ストラボンやプリニウスなど、ギリシア・ローマの古典史料に遡るものであり、クリュヴェ独自の見解が見出されるわけではなく、ギボンは『古代のイタリア』を読む前から知っていたとも考えられる。ただ、ギボンの蔵書には、同じクリュヴェの『古代のゲルマニア』と『古代のシチリア』も残されており、『ローマ帝国衰亡史』の中でもこれらの著作への言及が何度か見られることから、クリュヴェから大きな影響を受けていることが推測される。

1764年、ギボンはいよいよイタリア旅行へ出発するが、その旅行中の日記には、マレの『デンマークの歴史』及び『エッダ』のフランス語訳を読んだことが記されている。そこでは、『エッダ』について「古代ケルト人の聖なる書物、エッダ」⁴⁸⁾と書かれている。ギボンはこの後、タキトゥスを引用したりしながら、ゲルマンの宗教や精神性について語っており、『エッダ』については一応正しく理解しているようである⁴⁹⁾。

言うまでもなく、ギボンの主たる関心はローマ帝国にあり、ケルトにどれほどの関心を抱

いていたのかは分からないが、『ローマ帝国衰亡史』中ではケルトとゲルマンとは区別して扱っている。それにも拘わらず、ギボンが、『エッダ』を「ケルトの聖書」と呼んでいるのは、ギボンは、少なくともその宗教や精神世界に関して、ケルトとゲルマンとの間に大きな違いはないものと考えていたのかもしれない。そうであるならば、哲学的歴史と「考証研究」という2つの流れを統合したギボンにおいても多様なケルト像を整合的にまとめて理解することは出来なかったと考えられる。

おわりに

本稿では、ケリウス伯とギボンのケルト観を見てきた。この2人のケルト観のみから、18世紀好古家のケルト観を一般化して語ることが出来ないが、差し当たり、この2人のケルト観が本稿冒頭で紹介した歴史研究の流れの中にどのように位置づけられるのかについて、展望を述べ、結びに代えたい。

ケリウス伯は、巨石建造物をケルト以前のもものと疑い、ケルト人を過大評価せず、遺物や遺跡にのみ基づいて語った。より正確には、遺物や遺跡についてのみ語ったと言った方が良いかもしい。さらに、ケリウス伯は、神像などの宗教的遺物からフィブラや食器などの日用品まで多彩なテーマを取り上げ、古代の復元を試みている。非文献史料、特に遺物を詳細に検討するケリウス伯の手法は、考古学の先駆と評されるのにふさわしいもの⁵⁰⁾であり、学術研究としては、好古家による古代史研究の1つの到達点と評価することが出来るかもしれない。ケルト観の形成と普及という観点でも、個々の遺物や遺跡に関する詳細な説明は、ケルト人に具体的なイメージを付与し、巨石文化をケルトと結びつけるような、今日の基準での誤りを少なくすることに成功しているといえるだろう。その一方で、『古遺物集成』の構成は入り組んでおり、同じテーマが複数の巻に現れるなど、体系的理解を促すようなものとはなっていないため、体系的なケルト観の形成という点では、課題を残している。

この点は、ギボンにおいても同様であり、体系的なケルト観というものは欠如している。この体系化の不備という点が、好古家による遺物・遺跡などを用いた博識的実証研究の限界だったのではないだろうか。好古家は個々の「モノ」を通して、日常生活の細部のような、文献史料では必ずしも十分に語られない領域を開拓し、荒唐無稽な伝説に基づく起源論などを退けることが出来た。しかし、このような手法は、起源論など理論的枠組みの問題点を洗い出すことは出来ても、体系化には向いておらず、古典文献と遺物とを融合したケルト観を生み出すことは出来なかった。ギボンは史学史の伝統があるローマに関しては2つの流れを統合することが出来たかもしれないが、史料状況が遙に劣悪であるケルトに適用出来るほど精緻なものではなかったため、体系的なケルト観の形成は、19世紀以降の歴史記述を待たなくてはならなかったのではないだろうか。

註

- 1) 拙稿「古典学と『ケルト』の表象」『洛北史学』第6号, 2004年, 1-21頁参照。
- 2) Momigliano, A.D., 'Ancient History and the Antiquarian', *Contributo alla storia degli studi classici*, Roma, 1955, pp.67-106.
- 3) 年代学論争については, 前掲拙稿, 12-13頁, Grafton, A., *Joseph Scaliger* vol.2, Oxford, 1993, pp.21-141, 前川貞次郎『歴史を考える』ミネルヴァ書房, 1988年, 2-27頁及び岡崎勝世『キリスト教的世界史から科学的世界史へ』勁草書房, 2000年, 51-64頁を参照。端的に言えば, 宗教改革以降, 聖書のテキスト研究の進展により, ノアの洪水やその後のユダヤの系譜などの年数がヴァージョンにより食い違っていることが知られるようになり, また, エジプトや中国などの東方の歴史が紹介され, その年代がノアの洪水や天地創造よりも古いとされていることなどを契機として, 聖書記載の出来事の年代と歴史上の事件の年代を巡って起こった論争のことである。
- 4) Momigliano, A.D., *op.cit.*, pp.67-106.
- 5) 阿河雄二郎「近世フランスの歴史記述 ―フランス「国民」の起源問題を中心に―」『関西学院史学』36号, 2009年, 51-78頁。
- 6) 原聖『＜民族起源＞の精神史』岩波書店, 2003年, 73-123頁, 原聖『ケルトの水脈』講談社, 2007年, 305-315頁などを参照。
- 7) Caesar, B.G., 1.1.
- 8) 原聖『＜民族起源＞の精神史』岩波書店, 2003年, 84頁, 原聖『ケルトの水脈』講談社, 2007年, 22頁などを参照。
- 9) ジャン・ルメール・ド・ベルジュ及びフランクス伝説について, 詳しくは, 阿河前掲論文, 57-61頁, 原聖『＜民族起源＞の精神史』岩波書店, 2003年, 76-84頁などを参照。
- 10) ヴィテルボのアンニウスについては, Piggot, S., *The Druids*, London, 1968 (rep. 1985) (邦訳『ケルトの賢者「ドルイド」』鶴岡真弓訳, 講談社, 2000年) pp.123-124 (邦訳228～231頁), 原前掲書, 76-84頁などを参照。
- 11) Nicolet, C., *La fabrique d'une nation*, Paris, 2003, p.47.
- 12) 紀元前2世紀から1世紀にガリアへ侵入したゲルマン系の部族。
- 13) 古代に小アジア内陸部に居住していた人々。
- 14) *Ibid.*, pp.49-50.
- 15) Montaigne, M.de, *Essais livre premier* 2 ed. by Plattard, J., Paris, 1931, p.209, p.221, Montaigne, M.de, *Essais livre second* 1 ed. by Plattard, J., Paris, 1931, p.85, p.94, p.106, p.146 etc.
- 16) ケリュス伯の著作に関しては, Peeters, K., 'Bibliographie critique du comte de Caylus', Cronk, N.&Peeters, K. (eds.), *Le comte de Caylus: Les arts et les lettres*, Amsterdam&New York, 2004, pp.277-363を参照。
- 17) 18世紀には, 『古遺物集成』はエジプトの部分が特によく読まれたようである。例えば, 1786年に出版されたラルシェによるヘロドトスの訳注では, エジプトの部分で『古遺物集成』がしばしば引用されているのに対し, ケルトなど西方に関してはシモン・ベルティエの『ケルト人の歴史』などが利用され, 『古遺物集成』はほとんど利用されていない。Larcher, P.-H., *Histoire d'Hérodote*, vol.2, Paris, 1786, p.220, p.225, p.233, p.323, p.466などを参照。なお, ベルティエについては原前掲書, 116-117頁を参照。
- 18) ヴィンケルマンとの関係については, Décultot, É., 'Winckelmann et Caylus. Enquête sur les rapports de l'histoire de l'art au savoir antiquaire', Cronk, N.&Peeters, K. (eds.), *op.cit.*, pp.59-78を参照。
- 19) Comte de Caylus, 'Nocron, conte allobroge', *Œuvres badines et galantes du Comte de Caylus choisies et précédées par Radeville et Deschamps*, Paris, 1921, pp.239-260.
- 20) 現在のフランス中部ヴィエンヌを中心とする地域に居住していた部族。
- 21) Comte de Caylus, *Recueil d'antiquités* vol.3, Paris, 1759, pp.321-322.
- 22) *Ibid.*, pp.321-439.
- 23) アメリカ原住民の姿を古代のケルト人に投影する態度は既にエリザベス朝期から見られることが

ピゴットなどによって指摘されている。

- 24) Comte de Caylus, *op.cit.* vol.4, Paris, 1761, pp.355-407.
- 25) Comte de Caylus, *op.cit.* vol.5, Paris, 1762, pp.269-271.
- 26) *Ibid.*, pp.269-341.
- 27) Comte de Caylus, *op.cit.* vol.6, Paris, 1764, p.375.
- 28) *Ibid.*, p.406.
- 29) ストックリーについては, Piggot, S., *op.cit.*, p.136, pp.146-150 (邦訳 251-252 頁, 265-270 頁) を参照。また, 巨石建造物とケルトやドルイドとの関わりについては, Stukeley, W., *Stonehenge, A Temple Restor'd to the British Druids*, London, 1740, pp.1-10 などを参照。
- 30) Comte de Caylus, *op.cit.* vol.6, Paris, 1764, p.406.
- 31) Comte de Caylus, *op.cit.* vol.7, Paris, 1766, pp.237-330.
- 32) Comte de Caylus, *op.cit.* vol.3, Paris, 1759, pp.321-322.
- 33) ギボンの蔵書に関しては, Keynes, G. (ed.), *The Library of Edward Gibbon* 2nd ed., Surrey, 1980 を参照。
- 34) Gibbon, E., *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, 1776-1788 ed. by Womersley, D. vol.1, London, 1994, pp.997-1000.
- 35) *Ibid.*, p.60.
- 36) 本稿執筆時点 (2010 年 11 月現在) で公開されているものに限る。
- 37) Sheffield, J. (ed.), *The Miscellaneous Works of Edward Gibbon* vol.4, London, 1814 (rep., New York, 1971), p.399.
- 38) *Ibid.*, pp.414-416.
- 39) この 2 人の書簡のやりとりに関しては, Norton, J.E. (ed.), *The Letters of Edward Gibbon* vol.1, London, 1956, pp.387-390 を参照。
- 40) *Ibid.*, pp.16-18, p.29.
- 41) Bonnard, G. et al. (eds.), *Miscellanea Gibboniana*, Lausanne, 1952, p.104, Norton, J.E. (ed.), *op.cit.*, p.136.
- 42) Bonnard, G., *Le journal de Gibbon à Lausanne*, Lausanne, 1945, pp.89-164.
- 43) 紀元前 3 世紀に数度にわたり, イタリアへ侵入したとされるケルト人の部族。
- 44) *Ibid.*, pp.100-102, pp.105-108 etc.
- 45) Sheffield, J. (ed.), *op.cit.*, pp.155-326.
- 46) *Ibid.*, p.160, pp.178-179, p.221.
- 47) *Ibid.*, p.171.
- 48) Bonnard, G. (ed.), *Gibbon's Journey from Geneva to Rome*, Edinburgh, 1961, p.159.
- 49) 筆者はギボンの読んだマレの訳書に関して未見であり, マレの訳書の中にギボンに誤解を生じさせるような記述があるかどうか未確認である。なお, マレに関しては原聖『＜民族起源＞の精神史』129 頁に紹介があり, 同じ頁に, 「スカンジナビア人がケルト人の末裔だという考え方は, 前章に紹介した (17 世紀に現れた) ゲルマン人とケルト人の同一民族説の中で一般に受け入れられていた」 (括弧は筆者による補い) とある。
- 50) Grenier, A., *Manuel d'archéologie gallo-romaine* vol.1, Paris, 1931, pp.42-47.

【付記】本稿は平成 22 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) による研究成果の一部である。